

舟越 桂 私の中にある泉

Funakoshi Katsura "Exploring My Inner Fountain"

2020年12月5日（土） - 2021年1月31日（日）

※会期中、一部展示替えがあります。

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展覧会の会期・開館時間・イベント等が変更・中止となることもございます。最新情報は当館HPまたはSNS等でご確認いただきますようお願いいたします。



①舟越桂 《水に映る月蝕》 2003 楠に彩色、大理石 作家蔵 撮影：今井智己

◆ 展覧会概要

現代日本を代表する彫刻家、舟越桂（1951-）は、東京藝術大学大学院在学中に函館のトラピスト修道院から聖母子像制作の依頼を受けたことを契機に、本格的に木彫での人物像の制作を開始しました。1980年代にはじまる楠の木彫彩色の人物像は、1990年代前後から異形化が試みられるようになり、新たな表現領域が切り拓かれていきました。

舟越は、一貫して人間の姿を表すことにこだわり、「自分の中の水の底に潜ってみるしかない」と、創造にあたってまず自分自身と向き合う姿勢をとり続けてきました。その背後には「ある個人を特定して語っていく事、それが普遍的に人間について語る事になっていく」という思いがあり、また創作の源となる作者の内面は、ひそかに外につながる水脈を保つ地底湖のように、社会的あるいは個人的な様々な事象を受けとめ揺らぎ続けてもいるのです。

本展ではこの作家の心のありようを、「私の中にある泉」と呼びます。そして、1980年代から今日までの代表的な彫刻作品にくわえ、ドローイング、版画、何かを思うたびに書き留められるメモ、自作のおもちゃや小物などをつぶさに見ていくことで、作品が生み出される作家自身の内なる源泉の姿そのものを探ります。

◇ 展覧会構成

1章 私をあゆむ、私はつくりだす

舟越桂は、東京造形大学と東京藝術大学大学院の彫刻科で学んだ。20代のはじめには函館のトラピスト修道院の聖母子像を依頼される。この大作の制作以後、「楠」を作品の主要な材料とするようになった。この後《妻の肖像》を皮切りに、木彫の人物半身像を多く手掛けていく。最初期には目は入れていなかったが、やがて大理石による瞳をはめ込むようになった。1980年代に手がけた木彫像はさりげない日常の衣装をまとい、現代を生きる等身大の人物のようでありながらも、どこか抽象的で静謐な雰囲気漂わせている。

2章 私は存在する

舟越の多くの人物彫刻は、動きを抑制し直立した半身像の姿で制作されている。制作は、まずデッサンから始まることが多く、これが仕上がってから木を彫り始める。いずれの過程でも最終的な形を生み出すまでの格闘が続く。

しかし、実在のモデルをもとに制作することは次第に減っていき、1990年代前後からは、体の一部が変形する「異形」と呼ばれる人物像が現れてくる。学生時代、山を見た際の体験をもとに制作された《山を包む私》では、人間という存在の大きさと不思議さを象徴するイメージが、体験から20年以上を経て、作品となっている。

3章 私の中に私はみつける

1990年代前後からみられた舟越作品の「異形化」は、2000年代に入ってより本格化し、現実の人体にはありえない形態や表現が、より自由に展開されていく。2003年には、《水に映る月蝕》を制作。約20年ぶりの裸婦像となった。

その後、2004年には古代神話に登場する怪物スフィンクスをモチーフとした作品の制作を開始。この半人半獣で両性具有の身体と長い耳をもつスフィンクスを表した「スフィンクス・シリーズ」は現在に至るまで制作が続けられている。本展では2020年制作の新作《スフィンクスには何を問うか?》も出品される。

舟越は、スフィンクスを、人間を黙って見つめ、見透かしている存在であると同時に、その人間の中でも己を見ているもう一人の自分であるとも捉え、その姿を通して、人間という存在について観る者に問いかけている。

4章 私は思う

舟越は制作の途上で考えたこと、感銘を受けた言葉などを、ノートやボール紙の切れ端にさまざまに書き留めてきた。これらの思考や記憶の痕跡ともいえるメモの一部はアトリエの壁にも貼られている。また、アトリエにはテレビが置かれ、報道やドキュメンタリーなどの番組が流れている。人間の英知や文化だけでなく、世界各地で起こる戦争、紛争、凶悪事件などの負の所業、そして自然災害や疫病などのカタストロフィを映し出す画面は、世界と作家をつなぐ水脈のような役目を果たしているのだろう。テレビで見かけた事象に反応して書かれたメモもある。いま・ここに身を置きながらも、思いは、時間や空間を超え縦横無尽に広がっていく。



左:②舟越桂《妻の肖像》1979-80 楠に彩色 作家蔵 撮影:落合高仁



右:③舟越桂《夏のシャワー》1985 楠に彩色、大理石、眼鏡 世田谷美術館 撮影:落合高仁



左:④舟越桂《山を包む私》2000 楠に彩色、大理石 個人蔵 撮影:内田芳孝



右:⑤舟越桂《「水に映る月蝕」のためのドローイング》2003 紙に鉛筆 作家蔵 撮影:今井智己



左:⑥舟越桂《戦争をみるスフィンクスⅡ》2006 楠に彩色、大理石、革 個人蔵 撮影:内田芳孝



右:⑦舟越桂《スフィンクスには何を問うか?》2020 楠に彩色、大理石、革 作家蔵 撮影:岡野圭

5章 私の中をながれるもの

舟越桂は彫刻家の父、舟越保武と詩人の舟越道子のもと、7人兄弟の次男として生まれた。父の保武は、主に清楚な女性像や、キリスト教を主題とした作品を制作した彫刻家であった。また、母の道子は、13歳で句作をはじめ、早熟な才能をもった俳人であり、結婚後は句作から離れていたものの、晩年には句作を再開。さらに、洋画家の難波田龍起から絵画も学んでいた。

幼少期から父のアトリエに入って遊んでいた舟越は、「僕も彫刻家になるのだろう」という漠然とした思いを抱いていたという。同様の環境で育った弟の直木も彫刻の道を選択している。直木は、初期は絵画作品を制作していたが、80年代後半から彫刻制作に転じ、詩情豊かで生命力にあふれた抽象彫刻などを制作した。

彫刻家としての舟越桂は、特に父から多くのことを学び影響を受けながらも、己の表現を追求してきた。本章では、舟越家各人のドローイングと絵画作品を紹介することで、彼らの中に確かにある「ながれるもの」を感じながら、芸術家としてそれぞれ異なる表現を求める彼らの姿勢を紹介する。

6章 私ははぐくむ

本章では、舟越が自身の家族のために自作したおもちゃを紹介する。「木彫をやっていて出てきた、捨てるにはもったいない大きさの木っ端を利用した」ことがきっかけで作り始められたおもちゃは、用途にあわせて創意工夫が施されている。

私たちは、これらのおもちゃを前にした際、少なからず作家の家族に対するあたたかな視線を共有することになり、どこか懐かしさや温かさを感じる。作家としてのものとは異なる舟越の一面を伝えるものである。



⑧舟越桂《板きれの人形》1985頃 楠、杉、針金
舟越械、舟越みも、末盛武彦、末盛春彦、その他蔵

◇ 会期中イベント

◆ スペシャル対談（映像上映）

舟越桂氏×いとうせいこう氏（作家・クリエイター）

本展のために収録された対談の映像を上映します（対談者の登壇はありませんので、ご了承ください）

1月23日（土）午後2時～（約1時間30分）地下2階ホール

*無料（要入館料） *定員40名（申し込み先着順） *事前申し込みが必要です。「スペシャル対談」係まで。

映像協力：安井章浩（デフコンファイブ）

◆ 特別インタビュー「舟越桂、自作を語る」（映像上映）

作品や制作、本展の裏側など・・・本展のための特別インタビューの映像を上映します（舟越氏の登壇はありませんので、ご了承ください）

12月20日（日）①午前11時～ ②午後2時～（各回 約1時間） *無料（要入館料）

*各回定員40名（申し込み先着順） *事前申し込みが必要です。「特別インタビュー」係まで。

映像協力：屋上

◆ レコード&CDコンサート

舟越桂氏所蔵のレコードやCDを聴きながら作品鑑賞ができる特別な一夜！展示室にランダムに選曲された音楽がながれます。曲目は当日のお楽しみです。

12月26日（土）午後6時30分～（約1時間）

*無料（要入館料） *定員30名（申し込み先着順）

*事前申し込みが必要です。「レコードコンサート」係まで。

◆ 特別講座「舟越桂の世界

一展覧会開催にあたって」

1月10日（日）午後2時～（約1時間）地下2階ホール

講師：西 美弥子（本展担当学芸員）

*無料（要入館料） *定員40名（申し込み先着順）

*事前申し込みが必要です。「特別講座」係まで。

事前申し込みは往復はがき、またはメール（event@shoto-museum.jp）にて

〒・住所・氏名・年齢・日中連絡のつく電話番号をご記入の上、各イベント係まで。各イベントごと1通につき1名まで申込可能。

*「特別インタビュー」は参加希望時間帯をご記入ください。

* 迷惑メール等の受信制限をされている方は、事前に@shoto-museum.jpドメインより受信できるようにしてください。

◆ 学芸員によるギャラリートーク

12月11日（金）、1月9日（土）、17日（日） 各日午後2時～ 約40分

* 無料（要入館料） * 事前予約の必要はありません

◇ 開催概要

展覧会名 舟越 桂 私の中にある泉 Funakoshi Katsura "Exploring My Inner Fountain"

会 期 2020年12月5日（土） - 2021年1月31日（日） ※会期中、一部展示替えあり

開館時間 午前10時～午後6時（入館は午後5時30分まで）

※本展会期中、毎週金曜日の夜間開館（一午後8時）および館内建築ツアーは中止いたします

入館料 一般500円（400円）、大学生400円（320円）、高校生・60歳以上250円（200円）、
小中学生100円（80円）

*（ ）内は団体10名以上及び渋谷区民の入館料 * 土・日曜日・祝休日は小中学生無料

* 毎週金曜日は渋谷区民無料 * 障がい者及び付添の方1名は無料

休館日 月曜日（ただし、1/11は開館）、12/29（火）-1/3（日）、1/12（火）

主 催 渋谷区立松濤美術館

特別協力 西村画廊

会 場 渋谷区立松濤美術館 〒150-0046 東京都渋谷区松濤2-14-14

電話：03-3465-9421 HP：https://shoto-museum.jp

交通案内

●京王井の頭線 神泉駅下車徒歩5分

●JR・東京メトロ・東急電鉄 渋谷駅下車徒歩15分

※駐車場はございません

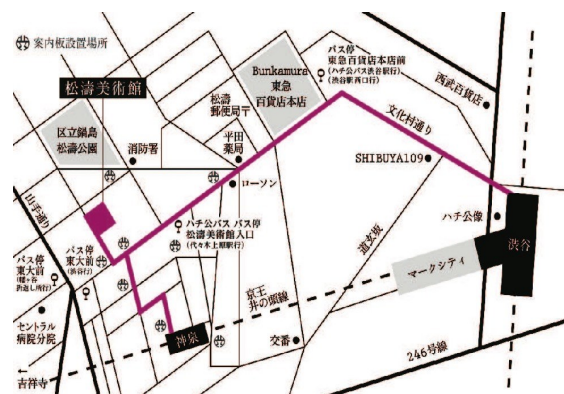
◇ 次回展覧会のご案内

2021 松濤美術館公募展

2021年2月12日（金）-2月23日（火・祝）

サロン展「渋谷区松濤美術館所蔵 南薫造 日々の美しきもの」

2021年2月12日（金）-2月23日（火・祝）／2月27日（土）-3月7日（日）



報道関係のお問い合わせ

広報担当：西・木原(pr-sma@shoto-museum.jp) 展覧会担当：西(nishi@shoto-museum.jp)

平泉(hiraizumi@shoto-museum.jp)

電話：03-3465-9421 FAX：03-3460-6366

- * 画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号をお知らせください。 * 画像のご利用後、データは破棄してください。
- * 画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとしてください。 * 基本情報確認のため、一度校正をお送りください。
- * 掲載後、見本誌をご送付くださいますようお願いいたします。